
報告者名	林 勲男	被調査者生年	1946年(男)
調査者名	林 勲男	被調査者属性	ささよ保存会会長
補助調査者	なし		

2011年3月11日の様子

地震が起きた後、保育所に行っている一番下の孫を迎えに行こうと先ずは考えた。しかし娘婿が迎えに行くというので、朝に刈り取ったワカメや茹でていた昆布を、地区の共同処理施設から持ってこようと港に向かった。船を岸壁につないであったので、ワカメを茹でる道具やホタテにつけるフロートなどを積載量 850 キログラムの車に可能な限り載せた。帰り道で海水が沖にまでかなり引いているのを見た。

中学校1年でチリ津波を経験していた(1960年)ので、今回もあの程度かと思っていた。そのときも、160メートルほど沖にある島の後ろまで引いた。今回はもっと引いたと言う人もいるが、海ばかりも見ていられなかったのも、実際のところはわからない。車が5台あったが、そのうち4台を我が家よりも高いところにある隣家の庭に上げた。娘は孫のおやつや果物の缶詰、米などを積んだ。

娘婿が孫を車で連れ帰り、そのまま隣家の庭に停めた。隣には長男1人がいて、「おじさん、何を持っていったらいいですか」と聞くので、何もいらぬから山に上がろうと言った。ご飯を炊いた釜も用意した。ここまでは来ないだろうとひとまず安心した。1波目は徐々に海水が上がってきて、予想外の高さまで水没した。

山の中腹(25~26メートル)で他の人たちを待たせた。海を見たとき、1波目が引かないまま、2波目だと思いが、かなりの高さで黒い壁になって、1キロぐらい沖に見えたので中腹では危ないと思い、さらに上まで登った。上には平らな場所があった。牡丹雪が降っていたので、孫が心配だった。山を反対側に降りていくと、空き家が2軒あるのを知っていた。人が住んでいる家がもう1軒あるので、そこに逃げこんだ。

水に浸かった病人(80代)を助けるために、娘婿と隣の長男など3、4人が山から下りて、交代で負ぶって連れてくるように指示した。そのお年寄りはずぶぬれであったので、その家の衣類を借りて着替えさせた。茶の間に寝かせ、お湯を入れたペットボトル数本で身体を温めた。ストーブがあったのでそれで暖を取った。1か月くらいはその家で3、4家族19人でお世話になった。

庭には、ドラム缶を半分に切って煙突をつけたかまどのようなものがあったので、11日から火を炊いた。外で薪を燃やし、できた炭を茶の間の掘り炬燵に持ってきて暖を取れるようにした。なるべく灯油は使わないようにした。周囲の山の立ち枯れしている木を切り倒し、朝から晩まで外で火を焚き、お湯を沸かし、顔を洗ったり、炊事に使ったりした。

避難生活

今回の津波は昼だったので、多くの人が仕事に出たりしていたために、安否を確認できるまでだいぶ時間がかかった。確定申告のために1台の車で一緒に出かけた奥さんたちの安否がわからず、全員の無事が確認できるまで1週間ほどかかった。

日にちが経ってから幸運だったと思うのが、①昼であったこと。夜だったら海水が見えないので、人的被害は倍以上になっただろう。②田舎だったこと。避難中は水を近くから汲むことができたし、物資到着までの食料の確保ができた。志津川のギンザケの養殖場が被害を受け、幅3メートルほどの寄木の川に、ギンザケがたくさん遡上してきた。それをアワビを採る1本の鉤でひっかけて捕まえた。災害の情報が入ってこなかったから、原発事故

のこともその時には知らなかった。半月以上たってから、原発事故について知った。

45号線が細浦（歌津と志津川の間）で寸断されたので、物資が何日間か来なかった。避難所にも1週間後くらいに届いた。ましてや民家に避難していたのでなおさら届かなかった。一度、1.8リットル入りのペットボトル6本入りを2箱、手ぬぐいを2本繋いだものを帯にして、歌津中学校からここまで背負って運んだ。がれきを乗り越え、潜り抜けてここまで運んだ。支援物資の配給を受けとり避難所に行った時以外は、災害についての情報に接することがなかった。携帯電話が通じたのも20日以上が経ってからであった。

家族のこと

12日には、父親たちが子供たちの安否を確認しに学校へ行った。ここ寄木から学校に行くのに、どの道を通ったらいいか予め相談して行ったが、その通りには進めなかった。当時小学校3年生と中学校2年生の2人の孫の安否は11日はわからなかった。しかし、学校では12日には子供たちを帰せないと言われた。

13日は、自分も孫の顔見たさに婿と一緒に学校まで行った。大人1人に対して子供1人しか連れ帰れないことになっていた。自分たちは2人だったので、2人を一度に連れ帰れたが、複数の子供が通っていても、大人1人しか迎えに行かなかった場合は、子供1人しか連れて帰れなかった。

寄木の47軒中35軒が流され、自宅の場所に仮設を建てて住んでいるのは、話者と隣のお宅だけである。作業小屋を建てた家は他にもある。話者のお宅は7人家族なので、仮設住宅は2棟借りているが狭すぎる。もと自宅があった場所に小屋を建てて、寝泊りと作業をしている。ボランティアが4週間6人ほどで裏山への避難路を作ってくれた。

高台移転

一軒当たりの上限が100坪と決められているが、時期が終われば海の資材はすべて陸にあげて、保管しておかなければならないため、決して十分な広さではない。また、かなり臭いがするので住宅が密集しているところには置けない。したがって、海に近いこの土地（自宅跡）は、売らずに作業場とせざるを得ない。もちろん津波の危険は伴う。

備えについて

明治や昭和の津波については、先代などからある程度は聞かされていたが、年月が経つにつれて、忘れてしまっていた。宮城県沖地震について言われるようになってから、寄木は2か所の場所に分かれていて、それぞれに逃げるところを決めていた。

話者たちが避難した家のおじいさんは津波の1年前くらいに亡くなったが、薪など実に備えのいい人だった。長靴や防寒具なども数人分が揃っていた。昔の人だから覚悟があったのだろう。薪は30センチメートルくらいの長さに切ってあった。その人は魚屋で、市場からタコを生で買ってきて茹でて売っていた。タコを茹でるために薪を準備しており、まだ軽トラックで20台分から30台分くらいあるだろう。高台に移転しても、倉庫を建てて炭とか練炭、薪ストーブなどを備えておくべきだと思う

「ささよ」について

保存会の先代会長に頼まれたのが、3、4年前。被災後も法被さえあればできることなので、なんとかやりたいと考えていた。一度休んだり、家が建ってからということにしてしまうと、再開が難しいのではないかと思った。

当初、法被は買おうと思ったが、店に売っていないということなので、3枚は友人の奥さんが一晩で作ってくれた。返却せずに家で持っていた子供の分は流されなかった。ささよの行事は、海が見えるところでやりたいが、港のあたりで74、5センチメートルほど沈下しているので高潮が心配でもある。

前会長からは、残っている家を回ってから仮設住宅を回って欲しいということだった。残った家を回るのはそれほど時間がかからないが、仮設住宅もとなると、9軒入っている寄木の仮設だけなら問題ないが、62か63軒入っている仮設住宅団地もあり、寄木の人だけでないので、夜にささよでまわると隣近所に迷惑がかかる。そのため、

全世帯主には海岸までご祝儀とお神酒を持って来てもらって、子供たちが唄う形にした。最年長の子供がお神酒を上げて拝むので、一緒に参拝してもらう。そのあとで、寄木の仮設にだけ行く。

別の話者から、子供の数が減ったので全額を分配すると分け前金額が大きくなりすぎ、教育上よくないと考えて子供たちへの分配は一律いくらかにして、あとは積み立てにするようにしたとも聞いていたが、実際には、全て子供たちに任せてあるのでわからないそうである。メディア取材の人にも、お金の分配のところは撮影・取材しないように言っている。子供たちに小遣いとしてあげるわけではなく、あくまでも海上安全と豊漁を祈願してもらうことに対してのものだ。

ささよ太鼓

幕は流されたが、前会長の息子さんが見つけて、現会長のところに持ってきた。

大太鼓3、小太鼓7、すべて流されたので何とかしたいと思っていた。東日本鉄道文化財団から助成してもらった。100万円で大太鼓と小太鼓を各1台購入し、法被も30着を揃えた。法被は子供たち用と、旗を船に取り付けたり外してもらう手伝いをしてくれる大人用も揃えた。ささよ用に15着とささよ太鼓用に15着。



写真1 寄木浜



写真2 寄木漁港



写真3 被災後にボランティアがつくった避難路